



変わるものと変わらないもの

—進行中の歴史の中で—

津守 真

『幼児の教育』第一〇〇巻第十二号、「私が幼児教育を志した頃」(24)（最終回）の原稿を編集部に送った直後、ニューヨークの高層ビルがテロによって崩壊して多くの人々がその犠牲となつたニュースをテレビで見た。そのとき私共が聞いたアメリカ大統領の最初の言葉は「報復」だった。私は思わず身震いした。そして書き終わつたばかりの五十年前のアメリカの体験が蘇つた。ミネアポリスでの最初の晩にクラウンス夫人から、真珠湾のことは忘れないと言われた。しかし、そのことは二度と私共の会話には上らなかつた。心を通わせ合つた日常の家庭生活が次の日からはじまつた。ク



ラウンス夫人（おばさん）の死のときまで私共の友情は変わらなかつた。私はアメリカのことを書いて来た直後でもあり、現在進行中の歴史の中でこの続きを書き加えな
い訳にはいかない。

今回、テレビで「報復」という言葉を聞いたとき、私はあの戦争の裏側を見た思いだつた。歴史が一挙に第二次世界大戦開戦のあの時点にさかのぼつたような気がした。しかし、歴史は繰り返しても、決して元のところに戻りはしない。歴史の螺旋曲線は少しずつずれて違う点から続く。その転回点で人がどのように考えて新たなる出発点に立つかが問われる。二十世紀の日本に生をうけた者がこの半世紀に学んだことを無駄にしてはならない。いま私が直面しているのが二十一世紀初めの世界の現実だからこそ、報復ではなく、愛と慈悲を根本に据え直して生きるのが未来をつくるのではないか。殊に保育と教育にたずさわる者はこれまで以上に愛と慈しみの人間関係を大切にして毎日を過ごさなければと私は思った。

ガンジーの戦闘的非暴力

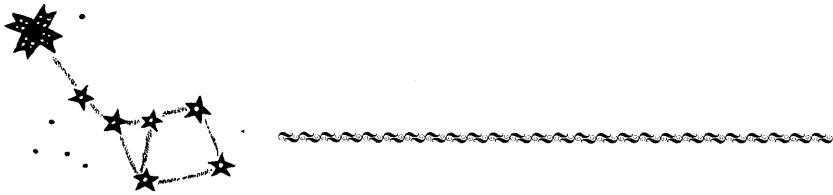
テロの後数日間、アメリカはこの五十年間に全く変わつてしまつたのかと重苦しい思いで私は過ごしていた。そのとき、ひとりの友人からガンジー研究所（アメリカ、テネシー州メンフィスにある）のメールが送られて來た。それは次のようなものだつ



た。

「九月十一日以来、多くの人から手紙や電話の問い合わせがありました。このように信じ難いほどの非人間的な暴力行為に対し、非暴力によつて応答するのにはどうしたらよいのかとの質問でした。非暴力は、危機の瞬間に用いることのできない手段です。非暴力は個人の態度であり——ひとつの国の集合的態度は個人の態度を基にしています——愛と慈悲と尊敬と理解と感謝の心に基づいてポジティブな人間関係を作り上げる態度です。……われわれに必要なのは、このような怪物を作るに至つた事態を冷静に分析すること、どうしたらこのような怪物を排除できるかではなく、どうしたらこのような事態を避けることができるかということです。正義とは人を作り変えることであつて、復讐ではありません。……テロリズムに対し非暴力をもつて答えるのにはどうしたらよいのでしようか。軍事力は決してバラ色の結果を齎しません。何千人の罪のない人々が巻き添えで殺されます。」

「今回のテロで愛する人々を失つた方々には深い悲しみと哀悼を表します。しかしこのエピソードを復讐心に変えてはなりません。怒りと憎しみはあなたに内的平和を齎しません。平和で尊敬すべき理解ある世界をつくるために、へゆるすことを学び、そのために献身することを学ばなければなりません。それによつて、今回の、またその他の暴力によつて死んだ犠牲者はより良く記憶されるでしょう。」とメールは結ば



れていた。たとえ少數者であつても、直ちにこのようにメールを送つてくれる人があることを私は嬉しく思つた。

エリクソンとガンジー

エリック・H・エリクソンは、言うまでもなく『幼児期と社会』（みすず書房）の著者であり、後年、人間のライフサイクルと歴史についての一連の著作でガンジーを詳細に研究している。一九六八年に南アフリカのケープタウン大学でなされた「洞察と自由」という講演はガンジーを主題としているが、現代までをも見通した情熱を内にこめたものである。その講演の日は「ヒロシマ」の原爆の日に当たることをエリクソンははじめに述べている（『Life History and Historical Moment Norton 1975』）。ガンジーの非暴力の主張は、消極的な受け身の非暴力ではなく、戦闘的非暴力（ミリタント・ノンバイオレンス）である。エリクソンはガンジーの言を引いて、「憎しみと暴力に立ち向かうことができるのは、朽ちることのない愛である。その単純な論理をもつて積極的に近づくならば、最も悪い敵にも癒しを作り出しができる」「あなたとあなたの敵とが対話の中で一緒になるとき、どちらの側をも害する事なく、両方が変容する。その行為が真理である」という考え方を詳しく述べる。ガンジーは当時の支配者英國に対して不服従運動を開拓するときにも、酷暑の時には英軍に道をあ



け、ユーモアをもつて相手に向かったと言う。エリクソンはこれらのことと語りつつ、現代のアメリカに言及する。「最も富んだ国、巨大な技術をもつて武力をほしいままにしている国、ときに精神病的に最も小さな人間が最小の武器によつて最大のものを払拭しよう」という衝動に駆られる国、また同時にそれらのことにもかかわらず、知的な若者達は、熱情をもつて国内外で現代の倫理の基盤を問い合わせ直そうとし、非暴力の思想をときには暴力的に推進しようとしている」。歴史は繰り返す。けれども、たとえ少数者でもその中で平和と非暴力の思想を抱き続ける人がいるのも事実である。

今年は国連が定めた「非暴力と平和の国際年10年」の第一年目である。その年に今回のが起きたのは皮肉であるが、それを国際的合意にまで作り上げたのもまた現代世界であるのは心強いことである。子どもに平和を教えるだけでなく、平和に生きられる環境を作るのが大人のつとめである。子どもの仕事をする者は、身近な小さなところで日々それを実現してゆくことができる。それが未来を作る最大の力であると思う。